

閑話休憩7

—じや　りふかい

贅^い之^の裂^{いれつ}は袴^{はかま}を穿^きく丈^{だけ}、上半身は裸のままに木刀を押つ取つて、眞神山の岩棚にある贅^い之家屋敷の大廊下を歩いているとき、障子の開け放たれた曾祖父の部屋の前で、床柱を背に端坐する第524代当主、贅^い之^の爲^{ため}弓草飛^{ゆみくひ}也^やから声をかけられた。

「そんな恰好でどこぞへ行くか」

「川に水浴びに行つてきます」

「この雨の中をか」

「どうせ濡れるから同じことです」

外は猛烈な雨だった。濤のように山を囲む眞神川は轟々と音を立てている。その激流を渡る龍爪橋を渡り、川に沿つて源流へと向かい、險阻な岩に挟まれた急な溪流を遡つた。木々が鬱蒼としている。緑の斑紋のあるブナの木は雨に濡れて幹が真つ黒で幽玄であつた。厳樜の老大木は眉根を寄せて睨む。樅は物思ひする人間の愚かさを嘲り、萌黄色したカエデの葉は人を冷やかに一瞥し、ヒノキは非情に、杉は無表情に沈黙する。繁る羊歯を捌き、滑りやすい黒い岩を怖れもなく、ひらりひらりと数知れず越えた。やがて幾つもの瀧が連なる峻嶒なる峡谷に出る。

「あゝ、こういう瀧の附近の神気とは何というものだろう。とても言葉に尽くせない。まさに神々しい聖域の気に満ちている。何だろう、この澄みきつた感じ。崇高な、この身をも蒼天の高みに昇らせるかのような爽やかさ、それでいて自然で静謐で、きよらかなだ。瑞々しい生命に満ちている。

生命とは言つても、生存を感じさせない」

咒を唱えて九字を切り、瀧壺に入ると、打たれた。打たれながらも陀羅尼を唱えた。終えると、齋戒沐浴後の清明^{すみあ}けく晰^しらけき心地して、清々しく寐が軽くなつたような感じがする。

「あゝ、これが真理でなくて、真理などいるものか」

岩の上で持参した黒漆塗りの木刀を青眼に構え、振り上げて気合とともに数回振り下ろす。「ぶっ」

気が附くと瀧のような雨に叩かれながらも毛孔が開き、全躰から汗が噴き出していた。

「実に爽快だ。」

生命とは何と素晴らしいことか。然し漲る生命というよりは、静かさに清澄なる、きよくさやかなる、かるらかさだ。いかな煩いも果て、死すとも悔いぬ想いだ。『禮記』孔子問居篇に『清明在躬氣志如神（せいめいみにあはきしかみのこゝ）』というものことか。すべてが遂げられた思いがする」

深い緑に囲まれ、しばし立ち尽くす。熱のない、氷のように青白い炎になった気分だった。奮起も赫奕たる活気もない、すべての荷が降りた、途轍もなく軽くなつた感覚だった。

遠く独虎白龍岳や龍首巒を眺める。

「ああ、天へと崇高するあの山岳や峯々の稜線には天地に呼応する生命を觀せられる。まるで龍のようだ。龍脈とはよく言つたものである」

枝葉が雨に撃たれざわめき、巖^{いわ}迸^{はな}る溪流や瀑布が音響かせ、すべてが鳴動するさなかにありながら、動中の静とも言つべき不思議は、まるで時が止まつたかのようであつた。